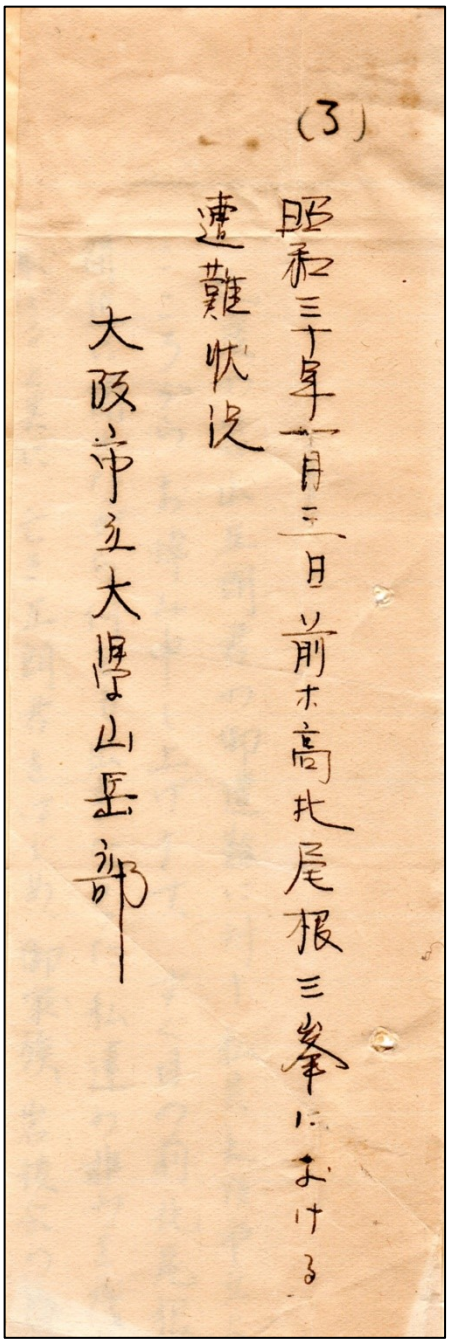
資料 8.1955 年 1 月 18 日付石岡宛大島健司氏からの手紙



(3)

昭和三十年一月三日 前ホ高北尾根三峯における

遭難状況

大阪市立大學山岳部

此度の若山五朗君の御遭難に対し、私共大阪市立大学山岳部一同
こころからお悼み申し上げます。すぐ目の前北尾根に居り、声も
間近に聞きながら何とも出来なかった私達の非力を残念に思い、自ら
恥じると共に、亡き五朗君をはじめ、御家族、岩稜会の皆様に深く御詫
び申し上げます。

同封しました写真には、パーティ三人の姿が微に入って居ますが、これは恐らく
五朗君最期の写真と思います。この冬山私達は北尾根を慶應尾根から
取付き、八峰下にベース・キャンプを設け、十二月三十一日に五、六のコルに第一キャン
プを作りました。元旦には大島と橋本信行が四峰頂上より奥又側へ出ている
尾根を約三十米行った岩蔭にツエルトを張って前穂へのアタックキャンプとする
ことにしました。丁度東壁Aフェースの下の大きな雪の斜面にトップが出たとこ
ろでした。雪の中に蹲り、柿色のザイルを白い雪の上に垂してトップが確保の
体制をとった頃、私は"ガンバレヨー"と声を掛けました。"ガンバルヨー"
という元気な返事を聞いて、私達二人は岩蔭の雪を除け、ツエルトを張
り、第二キャンプの夜を過す用意をしました。ツエルトを張り終って東壁を

見ると今しも あとの二人が雪の斜面（出て来たところ。記念にと、一枚撮ったのです。　どうか　この写真を以って、私共の哀悼の意を五朗君の御霊にお伝え下さい。

徳沢で登高会の方などから遭難の事情を少しくお聞きし、又帰ってから中日新聞の〝二つの遭難とナイロン・ザイル〟を読ませて戴き、詳しい事を知ったのですが、遭難の直接原因がザイルの切断によるものである事を知り、皆様の御無念　如何にとお察し致します。

〝ナイロン・ザイルの切断〟――実は私達もこの〝ナイロン・ザイルの切断〟を体験したのです。しかも五朗君遭難の翌三日、場所も前穂三峰で。

三人の東壁登攀をカメラに収めた後、一人が池の方（手を振るのを見てから、私達はツエルトに潜り込んだのですが、吹雪をしながら一度外を見た時はもうガスがかっていて、声だけが聞えていました。翌市に家のある橋本は〝アラヨー〟を聞いて岩稜会と知っていました。キニキャンプまで持って来た携帯ラジオを聞くと　松本放送で〝元旦の北アルプスは快晴で……　大阪市立大学、岩稜会……〟が次々　前穂高北尾根、奥又白……で……〟

と云うのを聞いてうれしくなったものですが、天気予報はあまりいいものではありませんでした。何時までも聞えている東壁登攀の声に"よくビバークなんだな、大丈夫なんだろうか"と二人で色々想像し、話しながらも早く寝ました。翌二日朝早く私達は一旦ツエルトを出、アタックに出発しましたが、吹雪に三回の五から引返しました。帰ってしばらくすると"アラヨー"が聞え、"登り切ったのかな"と思ったのですが、その後も時々聞えて来る"アラヨー"は、遠くかすかに聞えたり、近くなったり、何が何だか訳が分らぬようなもので、たゞ異常感だけをはっきりと感じさせました。釣尾根を奥穂の方へ行っているようだったり、三峰の上の方へ出て来たように近くになったりして、一体サポート隊なのか、登攀隊なのか全然分らず、こちらから相図をしてみようかと相談したりしたのですが、結局は下手に相図をして間違ってはと思いとまったのです。色んな想像に一日中息もつまりそうな気持を味わったものです。三日は少しでも天気が良くなれば飛出そうと待機し、午后になってツエルトを出ました。思わず"この下だ"というような声を間近に聞いて見上げると東壁の上に人影が四つ五つ、シルエットを描いています。時間的にとても無理だが行け

るだけ行って見ようと コル（下り）三峰に取付きました。
コルから西の涸沢側を五米乃至十米登って稜線（出）雪の小さい鞍部で橋本が確保し、大島がトップで奥又側を覗きながら約六・七米登ったと記憶しています。オーバーハングの下の岩に立とうとした時、バランスが崩れ、奥又側（墜落。同時に橋本は一歩涸沢側（下って）ショックに備えたのですが、何時まで経ってもショックが全然来ないので、怒る（ザイルを引上げながら覗くと ザイルが切断していたのです。

ザイルは TOKYO ROPE No. G.N. 10078 東京製綱 ナイロン十一粍で十二月に購入して この冬山に初めて使用したものです。切断は大島から四米五十糎の所で起っており、約十五糎はばらばらにほぐれて居り、あたかも ザイルの様を使って引き抜いたような感じです。そこから約十糎は三つに撚がほぐれて所々部分的に繊維が切れています。更に約十五糎は岩で擦った跡があります。大島の体重は当時の装備付きで十七貫。奥又（コルを約十米下った雪の中に墜っていて 橋本に連れられ ジェルト迄歩いて帰ったのですが その間の記憶は全然ありません。左尻全体を打って居り、翌日歩くのに相当

不便を感じたのですが、他に傷はありません。

ザイル切断の原因については、両人が墜落地点の状況を明確には覚えていないので、不明、不確実なところがあり、目下ザイルの切断個所について研究しているところで、未だ確定的な答を出せないのですが、取敢えず ナイロンザイル切断の事をお知らせして置きます。

登山界にナイロン・ザイルの普及しつつある今日 再検討を要する事項が徹底的に切断の原因を究明したく思います。これこそ亡き五朗君に対する最大の慰めと信じます。

よろしく御指導、御教授下さい。

奥又の雪に眠る五朗君の魂の安らかならんことを祈り

筆を置きます。

一月十六日

大阪市立大学山岳部
大島健司

岩稜会
石岡繁雄様